

## 幕末明治の写真師列伝 第九十九回 宮下欽 その二十一

9月15日、仙台藩は、藩主・伊達慶邦の採決によって降伏を決め、同月22日に官軍に投降する。この日、福島藩（板倉勝達三万石）も降伏。9月17日、上の山藩（松平重直四万石）も降伏。9月18日、天童藩（織田寿丸二万石）、棚倉藩（阿部正静十万石）も降伏。9月19日、ついに会津藩公用人・手代木直右衛門（諱：勝任 かつとう）、秋月梯次郎らが米沢藩を通じて土佐藩の本営に降伏願書を提出する。翌20日、土佐藩の板垣退助は降伏願書を受諾し、会津藩降伏の交渉がまとまる。22日、新政府軍からの発砲停止命令が出され、会津藩藩主松平容保と会津藩将士に開城を諭す。鶴ヶ城開城の令の文を見て、自害する会津藩士もいたといわれている。この日、容保の義姉の照姫が、城内にあった小切れを集めさせて、長さ三尺（約90cm）・幅二尺（約60cm）の降伏の旗を作ったという。こうして22日午前10時、ついに鶴ヶ城大手前の西側石橋の欄干に「降参」と大書された旗が立てられた。松平容保、喜徳父子は、鶴ヶ城外の内藤家と西郷家の間にある武場（本一丁目と甲賀町通りの交差点）に臨み、総督府宛てに降伏謝罪の書を提出した。当日の開城式は奥羽鎮撫総督府の軍監・中村半次郎（後の桐野利秋）と山県小太郎の立ち合いの下に行われた。その後、容保は、戦死者を投げ入れた二の丸の大空井戸に香花を供えて忠魂を礼拝し、容保らは新政府軍に滝沢の妙国寺に護送されて謹慎することとなった。開城時に城内にいた降伏の総人員は5235名。その内訳は、士・卒・兵が約2500人、その他藩脱走兵が約500人、傷病兵が約600人、婦女子が約1500人であった。この日山口村では、佐川官兵衛の部隊がまだ征討軍を撃破する戦いを続けていた。この夜12時頃に、山本八重が三の丸雑物倉の壁に、「明日の夜は何処（いづく）の誰か眺むらん 馴れし御城（みそら）に残す月影」の歌を笄で刻む。9月23日、城内の将兵が謹慎地の猪苗代に向け出発。老幼女子は現在の喜多方方面、傷病者は城南の青木村に移された。同日、庄内藩も仙台藩の投降を聞き、官軍に降伏を申し出る。（9月27日、鶴岡に入城した官軍に、藩主自ら城を出て降伏した）9月25日、南部藩も他の奥羽列藩全部が降伏したことを聞き、官軍に降伏を申し入れる。これにより奥羽列藩同盟の全ての藩は、降伏により恭順の意を表して、奥羽の主な戦闘は全て終焉となった。

9月24日、坂下駅滞在の松代藩部隊の二番小隊、六番小隊は、「田島駅周辺の残敵未だ蠢動しつつあり、暫時八十里越口の守衛にあたるべし」との命で、直ちに出発する。同夜、赤留村に進み、宿営する。9月25日、赤留村を出発し、銀山峠を越えて滝谷村に入る。翌26日、西谷へ進み、さらに残敵を求めて川井村に行く。24日、坂下を出発した松代藩部隊の三番小隊、八番狙撃隊は、25日に布沢村に入り、その地の守衛と残敵掃討の配置につく。9月26日、八十里越口にいた賊兵が移動して東河口村付近に集結しているらしいとの情報があり、この残敵を攻撃する準備に努める。9月27日払暁、密かに川井村を出発して河口村に進み、敵の動静が不明のため、更に西谷村まで進んで、敵の探索にあたる。松代藩部隊の四番小隊、五番小隊、六番狙撃隊も野尻村へ進み、四番小隊は野尻村を守

衛して、五番小隊、六番狙撃隊太鼓下し辺りの間道の守衛についた。

一方、同じ9月26日朝、若松城下に25日まで駐屯していた松代藩部隊の一番小隊、七番小隊、五番狙撃隊、七番狙撃隊、遊軍隊の5隊は再び坂下駅に引き上げる。翌27日午後、五番狙撃隊、七番狙撃隊も残敵蠢動の情報により、坂下駅を出発して、柳津村へ入り、そこで宿営する。翌28日、五番狙撃隊、七番狙撃隊は更に進んで沼沢村に入り、そこで二番小隊と合流し守衛につく。沼沢村守衛の三番小隊、八番狙撃隊は、同村内の吉尾に移り、その地を守衛する。9月29日未明、大塩村の二番小隊、六番小隊は黒谷村へ移動したが、賊兵は悉く退却していないため、警戒しつつ、残敵の動きを探ることにした。10月1日、二番小隊、六番小隊は黒谷村より大蔵村へ進み、その地を守衛していた水戸藩の連絡で、全面の敵が水戸藩の陣前に降伏してきたとのことで、水戸藩と協議の上、暫くの間、大蔵村に駐屯して、守衛の任につくこととした。

赤留村口に出張中の三番小隊、四番小隊、八番狙撃隊と、萩窪口に出張中の二番小隊は、4隊で連合して、永井野村に侵入した。すると田島辺りの賊が再び勢いを盛り返し、逆襲の構えを見せているとの知らせにより、直ちにその地を出て、進撃を始める。三番小隊と八番狙撃隊の2隊は、徹夜して野尻村へ到着する。四番小隊と六番小隊の2隊は、小中津村まで進む。二番小隊は沼沢村へ進撃して、守衛の任につく。

この10月1日、小林村に於いて松代藩の軍監、近藤民之助が降伏した兵の処置と鹵獲した大砲、銃器の処分について水戸藩と協議する。10月2日、二番小隊、三番小隊、四番小隊、六番小隊と八番狙撃隊は横田村に進軍する。この横田村で名主善蔵と組頭元蔵を召し取り会議所へ送る。会議所とは、この戊辰戦争でたくさんの藩兵が集まっていたことから、特に設置された機関で、総督府の参謀または監軍が主宰して会議し、各藩から参謀または軍監が出席して、次期作戦の協議と指示を行う機関のこと。『松代藩勤王事略私記』によれば、「十月二日横田村ニ至リ名主某ヲ召捕来リ会議所ニ差出ス是ヨリ先キーノ澤ト云フ所ヨリ二里程隔ッ山上ニ一軒屋アリ同所ニ先月廿四日ヨリ会藩山内大助小沼源蔵外一人潜居ノ由ニ付又々達之アリ嶮路深雪ヲ冒シ窃ニ右家ニ至リ松本藩ト（此召捕兵ハ五番小隊ヨリ五人松本藩ヨリ五人差出）共ニ四方ヲ取囲ミ戒心シテ押入ル然ルニ已ニ三人共自盡ニ及ヒ倒居ルー人ハ未タ死セス然レトモ言説分ヲス依テ直ニ斬首」とあり、太政官日誌明治紀元戊辰冬10月「会津方横田大助自殺ノ事」の記載によれば、10月23日松本藩届書写に「先月廿九日、奥州横田村庄屋善蔵、賊兵へ尽力謀計ノ聞有之ニ付、本日二日右善蔵並組頭元蔵生捕」とあり、さらに「奥州玉梨村ニ、会賊山内大学弟横田大助潜伏ノ聞有之趣、松代藩五人、弊藩モ同様、一同玉梨村へ出張、所々及探索候処同村山中一ノ澤ト申所ニ、横田大助、飯坂新内、小沼源蔵潜伏、大助、新内儀ハ自殺、新内儀ハ自殺致シ懸候ヲ、取押候得共、深疵ニテ絶脉ニ及ヒ候」とある。

（森重和雄）